

# 日本分子生物学会 キャリアパス委員会主催 ランチョンセミナー2018

## 研究にまつわるお金の話

- 日 時：2018年11月29日（木）11：30～12：45
- 会 場：パシフィコ横浜 会議センター3階301
- 司 会：大谷 直子（大阪市大・医）  
（参加者：約280名）

○司会（大谷直子） それでは定刻になりましたので、キャリアパス委員会主催ランチョンセミナー2018、本日は「研究にまつわるお金の話」というテーマで始めたいと思います。会の進行は、分子生物学会キャリアパス委員、私、大阪市立大学の大谷が務めます。よろしくお願ひいたします。

さて、毎年の年会で実施している、このキャリアパス委員会のランチョンセミナーですが、実はご参加の皆様にはお弁当だけではなくアンケートもお願ひしております。アンケートの前半は参加者の属性やセッションの評価に関するもので、後半は感想やテーマなどを自由に記述いただける構成になっています。これらを毎年事務局で集計して、翌年のランチョンセミナーのテーマの参考にしているのですが、いろいろなご意見が寄せられるなか、ここ数年で増えていたのがこの「お金」に関するものです。そこで、なかなか取り上げにくいテーマではあったのですが、今年はこちらを取り上げるようにしました。

「お金」といってもいろいろあると思うのですが、本ランチョンセミナーでは、大学院生の経済事情や研究者の収入、研究にまつわるお金がどのように調達され、使われていくのか、などについて、皆さんと一緒に情報共有したいと思っています。まずはキャリアパス委員長の小林武彦先生より、本年9月に実施した事前アンケートのポイントについて解説をお願ひしたいと思います。そのあと、パネリストと会場の皆さんで、ケータイゴングを使ってディスカッションしていきたいと考えております。入り口でお配りしたアンケート用紙にあるQRコードか、こちらのURLからアクセスできますので、ぜひ皆さん積極的なご参加をお願ひいたします。それでは小林先生、よろしくお願ひいたします。

○小林武彦 皆さんこんにちは、キャリアパス委員会の委員長を仰せつかっております、東京大学の小林です。パネルディスカッションがメインなのですが、その前に会員の皆さんにご協力いただいたアンケートが2つありまして、1つは第4回日本分子生物学会男女共同参画実態調査というアンケートで、これは2年前に採ったものです。集計が終わりましたので今回5分ほどでご紹介します。後半は、先ほど大谷先生のお話にありました8月下旬から採らせていただいた「研究にまつわるお金の話」のアンケート結果を紹介し、それをたたき台としてパネルディスカッションにつなげたいと思います。

まず、男女共同参画のアンケート、これは1,788名の会員に回答をいただきました。ありがとうございました。それで、いつも言われていることですが、「家庭と仕事の両立が困難」「育児・介護期間後の復帰が困難」。こういうところが女性の研究者が少ない理由として、皆さんが感想としてお持ちです。どうすればいいかというところ、「可能な限り業務の効率化を図る」あるいは「ライフイベント中の研究者の生活環境を整備する」。これも何度かこの会でも話しましたがけれども、仕事は先送りできてもライフイベントは先送りできない。ライフイベントを優先して行えるような環境づくりというのは、再三この委員会でも言っているところでございます。

雇用に関してもあまり状況は変わってなくて、私は4年前からこの委員会の委員長を引き受けていますが、その時にはポストク問題があつて、結局そのままやむやみというか、年数の経過とともにその

人たちが高齢化していったら違う職業に移っていったから自然解消みたいな状態になっているのですが、現在でもさほど状況は良くなく、生命科学系では「任期付き」から「任期なし」に移行するのがほかの分野に比べて5年ほど遅いという結果になっております。大学を卒業してから10年を超えた人でも、40%以上の人はまだ「任期付き」で、30代の「任期付き」が非常に多いという、いびつな格好になっているというわけです。「安定した雇用が得られる工夫。キャリアパスの多様化」が重要だろうということです。

それと、指導的地位の女性比率が低い理由ですが、これは「家庭との両立が困難」という理由が一番高いのですが、男女で意識の差があるという回答がありまして、この辺が割と興味深いです。例えば、一番右の括弧ですと「上司として女性が望まれない」と考えているのは女性の比率がかなり高く、男性の5倍近く。あるいは、真ん中の括弧で囲まれています「評価者に男性を優先する意識がある」は、約3分の1の女性がそう思っていますが、男性はそれほど思っていない。この辺の意識のずれというのは重要かもしれません。役職指数、これは年を取っていくとだんだん増えていくのですが、その比率が男女で高齢になればなるほど差が大きくなりますという話です。

女性比率改善のために行うべき措置ということで、例えば「業績評価におけるライフイベント等の考慮が必要ではないか。研究支援者の配置。女性を積極的に採用する」ことが重要なことということが掲げられています。「多様性の受け入れ。無意識のバイアスの自覚から離れていく」ことが重要ということですね。我々、生物学をやっているわけで多様性というのが重要ですから、いろいろな人がいる。いろいろな人と協力し合って研究を進めていくということが一番重要ですね。

まとめとして、日本における女性研究者の割合は2017年3月時点で15.7%、先進国で最低でございます。分子生物学会は学生会員が37%で一般会員が20%ですから、まだいい方ということになっているのですが、制度と意識の改革が必要で、今後もこういった男女共同参画の活動をしていくことが重要であろうということですね。

実際に、これが今年の分子生物学会の参加者の属性調査ですが、正会員の20%が女性、学生会員はそれよりも多くて38%となっております。これが、この年会でのオーガナイザーの比率です。今年は組織委員の方々、プログラム委員会の方々のご努力により、女性会員とほぼ同じ比率の女性オーガナイザーが担当しております。これはすごく良かったですね。これで男女共同参画のアンケート報告は終了させていただきます。

続きまして、これは今回ここで話をする事前調査として採りましたアンケート結果です。「研究にまつわるお金の話」に関するアンケートということで、8月30日から9月12日に採らせていただきました。回答者数が608名です。どうもありがとうございます。実はスライドが40枚ありまして、かなり早口で飛ばします。早く終わらせるため重要なことだけ言いますが、そういう性格ではありません。一生懸命やっています。

男女比が3:1です。理想の職種は大学教授。だいたい満足している。仕事の内容は満足という方が多いのだけれども、研究費に不満がある。9割の方が研究を続けるにあたってお金の不安を感じている。この辺のところ今日のパネルディスカッションで重要な課題になってくるかもしれません。ただ不思議なことに、回答者数が少ないですけども、企業の方はそういうことが少ない。大学の関係者は学生も研究者も9割近くがお金については不安を感じています。

これは学生の答えです。大学院生がほとんどですが、111名の学生に答えていただいて、半分の方が「経済的サポートはなし」と答えていらっしゃいます。バイトをしているのですが、バイトはラボとか大学内が大半です。コンビニとかではなくてね。バイトで稼いでいる賃金はだいたい月額4万円以下。

それは何に使っていますかという、飲み代ではなくて生活費に使われている。これが重要。「重要」と書いてあるのは本当に重要です。バイトをせずに研究に専念したいと思いませんかという、「できればバイトをしないで研究に専念したい」というのがほとんどの人ですね。だから、好きでバイトをやっているわけではないということ。

「卒業後はどうするか」と学生さんに聞いた答えですが、博士課程の学生さんは「アカデミア・企業・公務員」が3:1:0.3ぐらいの感じですか。これは、私がこの委員会を始めた最初の頃は90%以上の方がアカデミアだったのですが、今は75%まで下がっていますから、だいぶ行先に多様性が出てきたかなという印象を受けました。修士課程の人は進学か企業か半々ですね。これは、分子生物学会に来る人が答えたのでちょっとアカデミアに対するモチベーションは高いと考えたほうがいいと思います。一般的な学生さんの平均ではありません。「企業への就職を決める決め手になった理由」を聞いたら、「経済的安定性、労働環境」に非常に魅力を感じています。これは就職することを決めている人の意見です。

学生さんでは博士課程の3分の1が学振DCをいただいている。こういうアンケートに答える方は割とモチベーションが高いですね。「お金」ですが、DCをもらっている人は20万円と決まっているから、DC以外の方でどのくらいどこからお金をもらっていますかというのは二極化されていて、4万円ぐらいの人と20万円ぐらいの人がいるということです。

これは「重要」。「減少傾向にある博士課程進学率は、どうしたら増加すると思うか」には2つ答えがあって、1つは「経済的サポートを充実させる（授業料を取らない）」、2つ目が「博士号取得者の就職を有利にする」。この下が「給料を払う」とか。要するにポジションとお金をもうちょっと充実させてほしいということですね。そうすればドクターに行きますよと、わかりやすいです。

ここが「重要」と書いてあるのですが、「博士号取得者の所得は、修士や学士と比べてどう思うか」と聞いたら、「変わらない」というのも多いし、「高いと思う」人も多い。「生涯所得はどうですか」と聞いたら、「低いと思う」という人が一番多かったのです。でもこれは間違いです。去年のこの会でも資料を持ってきて報告しましたが、やはり博士号取得者のほうが平均的には所得が高いというデータがあります。「学振DCの支給額はそのままで採択率をあげる」、当たり前ですね。それで「大学・研究所内の経済的支援に関する情報」が欲しい。

これはまた「重要」と書いてありますが、「指導教員の給与についておよその額を知っているか」というと、知らないという学生さんがかなり多かった。教員は言いませんよね、「私の給料はこのぐらいだ」とは。それで、知っている人に「その額についてどう思うか」といったら、「低い」、もっと上げてほしいのではないかという印象。先生方は給料の割にはいっぱい働いていますねみたいな印象を持っています。「ランチョンセミナーで概要の説明を聞いてみたい」のは学振の奨学金です。

今度は、管理職ではないPI、要するにポスドクとか助教の先生の答えですが、「今後、企業など非アカデミックで就職を決めている方・既に企業にお勤めの方」に聞きました。その理由は何ですか。アカデミアは「収入が不安定」だからというのが一番多いです。だから、安定を求めて企業に行くという方が多い。PIになるために必要なものは「研究実績、人脈、研究費」、この3つです。「人間性」も含めて4つです。これは覚えておいてください。これはPIの人と違うのですよ。「今年度のご自分の研究費の主要な財源」は「自身で獲得した科研費や民間助成金」というのが割と多いですね。昔は研究室のPIの研究費でやっていたと思うのですが、こちらが結構多い。でも、本当は研究費よりもポジションのほうが良いと思いますけど。安定して研究できる環境のほうが重要だと思いますけども。

これは、学振PDについて「現状のままでよい」というのが半分ぐらいですね。条件も「現状通り博士号取得後5年以内」かなというところですね。「年齢制限撤廃」とありますが、撤廃すると今度は倍

率が上がってしまいますので、それは一長一短ですね。それぞれの年齢で違った制度があるのが一番いいのかもしれませんが。

これは卓越研究員、「重要」と書いてありますけども、これは年齢制限が厳しいのですよ、39歳未満ですね。でも、これはかなり不満があって、「受け入れ機関が自由に決めればいい」。これは出せる人が少ないからマッチングが低いというのもある。「年齢制限撤廃」とか、年齢制限についてはもうちょっと考えたほうがいいのではないかと考えています。ランチョンセミナーでは「卓越研究員」とか「さきがけ」に興味があって、「現在の収入に満足しているか」では「ほぼ満足」が一番多いですね。

今度は教授、准教授など、管理職の方に聞いています。「PIになるために必要なものは何だと思うか」、これは「重要」と書いてある。「研究実績」が一番重要ではないか。次は「運」。さっき若手に聞いた時よりも「運」が重要。要するに異常な倍率なので運のいい人が選ばれているのではないかといいところですね。異常だと思います。良くないですよ。

これも「重要」と書いてある。「研究室運営について困っていること」は3つありまして、「継続して研究費を獲得する難しさ」、「PIが研究・教育以外の雑務にやりくりする時間の多さ」、これは研究時間の劣化と呼んでいますけども雑用が多すぎる。あと「研究費の採択率の低さ」。この3大不満があります。

それと、今度は「博士課程進学率は、どうしたら増加すると思うか」という設問に対して「博士号取得者の就職を有利にする」が1番。2番目は「経済的サポートを充実させる」です。3番目は「任期なしの若手のアカデミックポジションを増やす」でした。覚えている方もおられるかと思いますが、さっき非PI職の若手の答えはそうではなくて、1番が「経済サポート」だった。ボスはそのあとのポジションを何とかしたほうがいいのではないかと考えている。ちょっと違いますね。「運営交付金の配分方式」は「学生定員に応じた配分が望ましい」、これは当然ですね。

「現在の研究費制度（科研費）についての不満」です。「競争的資金の集中」、なんでこの人はいっぱいもらっているのだらうみたいな。それと「競争的資金の配分額」がおかしいのではないかと、3番目が「研究分野の多様性の欠如」です。なんでこんな分野ばかりが優遇されているのかというところ。これが科研費です。

トップダウン型のCRESTとかに関しては「競争的資金の集中」。やっぱり集中に対してかなり不満がある。あと「審査の公正性・透明性」。これは科研費ではあまり高くなかったですね。「研究分野の多様性の欠如」、これも同じです。この分野ばかりがなぜ。これはトップダウンだから、選んだ人がいるわけその人に直接言わなければいけないですね。

「重要」というのがあって、パブリックコメント。パブコメというのがあるんです。何か政府が決定すると必ず「意見を言ってくださいね」というのがホームページにこっそり出てきます。それは直接伝わるので、不満があったら書かなければいけないのです。したことがありますかと聞いたら「いいえ」が圧倒的に多かった。パブコメに対して「存在を知らなかった」、「書いても無駄だと思ったから」。これは無駄じゃないです。パブコメで圧倒的多数で反対が出たら国が考えざるを得なくなります。これは積極的にやりましょう。

「研究者の定年制度についての意見」もある意味では重要で、「現状のままでよい」と「審査により延長を認めるべき」が半々ぐらいですね。

「ランチョンセミナーで改めて概要の説明を聞いてみたい」ことは「AMED」。要するにこれはよくわからないのでしょ。あとのパネルディスカッションでちょっと出てきます。

最後にまとめです。Non PI と PI で意識の違いがあるのは、Non PI は「PI になるため」には人脈が重要だ。でも、PI の人はいや、そうではない。どちらかというところ「人間性」だよ。これには私も agree します。やっぱり PI になると雑用をシェアしないといけないので、すごく業績がいい人よりもすごく雑用をこなせる能力のある人のほうが好まれます。それは本当です。その辺のところはよく考えて、今後面接に行かれる人は行ったほうがいいのかもかもしれませんね。

「博士課程進学率は、どうしたら増加すると思うか」ということですが、これはとにかく「経済的サポートを充実させる」ですね。そういうところが非常に重要であるということで、どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 小林先生、ありがとうございました。それでは、ただいまの解説を踏まえ、パネルディスカッションを行いたいと思います。パネリストの皆さんはご登壇をお願いいたします。

このパネルディスカッションでは、会場の皆さんと意見を交換しつつ、建設的な議論ができればと思っています。では、まず自己紹介も兼ねて、パネリストご自身のキャリアと何かお金にまつわることに、若手の支援や研究費等、何でもいいのですけれども、何かありましたら、それも含めて1分以内でお願いします。それでは、胡桃坂先生からお願いします。

○胡桃坂仁志 東京大学の胡桃坂です。私は D2 のときから学振をもらいまして、本当に助かりました。D3 の時に子供が生まれたので、このままだと親子三人で食べるものにも困るという状況で学振をもらったので、本当に奇跡的に文科省に助けていただいた感じがしていたのですけど。なので、若い世代のサポートは絶対に必要だなと思っています。

○花嶋かりな 早稲田大学の花嶋です。今回お金にまつわる話ということで、自分のお金に苦労したことを考えてみたのですけれども、いろいろあるのですが、特にポスドクで海外に留学した時にアメリカの給料というのはかなり安くて、非常に貧困な生活をして、特に研究員の友達と会ってもサイエンスの話ではなくて、いかに貧乏であるかということをはたすら議論した記憶があります。ただ、その頃に苦労した人たちはみんなその後何らかの独立したポジションを得ているので、現状を打破するという熱意がそういうモチベーションにもつながるのかなと思います。今日のパネルディスカッションでは、ぜひ皆さんの問題を解決できるような方向に向けたらいいなと思っています。よろしくお願いします。

○中川真一 北海道大学の中川です。北大に3年前に赴任したのですが、それまで理化学研究所で15年ぐらいポスドクと若手 PI ポジションをやっていました。ビフォー理研期間とアフター理研期間でちょっと浦島太郎というか、大学というのが結構変わったなとすごく思うところがあります。今の学生さんの状況は昔と全然違うので、その辺どうやったらいい環境で研究してもらえるかなということを考えていきたいと思っています。

○加納純子 大阪大学の加納です。お金については、日々研究室では「ケチケチキャンペーン」を実施していて、本当にお金は大事だなと思う毎日です。あとで出てくるかわからないのですが、最近思うのはやっぱり中堅の、小さなラボを持っているような PI に対する補助がちょっと少ないような気がして、それは不満に思っています。

○小林 このパネリストはみんなお金を持っていると思われる方が多いかもしれませんが、新学術は3年連続で落ち、AMEDも落ち、CRESTも落ち、科研費だけみたいな。以上です。

○司会 どうも先生方、ありがとうございました。お金に関することということでなかなか慎重な感じですが、最後に私のことを少しお話しします。お金に関することを話しますと、大学院時代はピペットや50mlチューブまで洗って再生して使っていたような、本当にケチケチしていました。ある程度研究費が取れた今も、主婦感覚で、もったいない精神で、本当にケチケチとせっかくの研究費を大事に使っているつもりです。

それでは、最初の設問に行きたいと思います。皆さん、ケータイゴングの準備は大丈夫でしょうか。まずは属性についての設問です。それでは、「皆さんの属性について教えてください」。お願いします。アンケート用紙にあるQRコードかURLからアクセスできますのでお願いします。今回のテーマに関するコメントの投稿、もう既に5つ出ていますが、大変歓迎しておりますので積極的にコメントをお願いします。

属性が出てまいりました。昨日は学生さんが多かったのですが、本日はテーマのせいかな、「ポストドク、助教、講師、准教授、研究員等の非PI職」、そして「PI職」の方もいらっしゃるようですので、テーマとしてもディスカッションしやすいかなと思います。ありがとうございます。

次の設問に移りたいと思います。先ほど小林先生のお話にもありましたが、まず学生支援といいますがやはり日本学術振興会の特別研究員、学生の場合はDCになりますが、それが非常に大きな学生支援の制度だと思います。次の質問です。では、このDCは本当に申請内容でちゃんと決まっているのか。それとも何となくラボの力とか大学のネームバリューとか、そんなことで決まりがちではないかということも聞いております。このDCの申請について、この制度は公平な制度だと思いますか。「思う、思わない」。では皆さん、ケータイゴングお願いいたします。

ありがとうございます。ちょうど半々ぐらいですかね。公平な制度だろうと思っている方、思っていない方、だいたいフィフティ・フィフティ、95:76ということで出ております。では中川先生、このDCの制度についてご意見ありましたら、お願いします。

○中川 アンケートの結果が台本と違うので、どうしようかなと思っているところがあるのですが。僕自身は学振の書面審査は何回かしたことがあるのですが、合議のときにどういう話がなされているのかというのは僕自身がその場にいたことがなくてちょっとわからないのですが。書面審査をする人間の立場からすると、僕は基本的にDC1でしたら論文は見ません。だから学会発表のところも見ません。所属も見ません。やっぱり内容を見るのですよね。内容が面白かったら応援したいと思うので。たぶん僕が例外だとは思わないので、自信を持って、学生さんが今ちょっと少ないですけども、学振の良いシステムと思うので、自分の評価を低くせず、自分はこういう面白いことができるのだと思ってどんどん挑戦的な申請を書きいただければと思います。

ひとつ見分けがつかないのが、これは明らかにPIが書いたのではないかなという申請書と、この人はものすごく早熟でこんな文章が書けるのか、それはわからないですよね。でもPIの方には、やっぱり学生さんの力で書かせてほしいということをお願いしたいです。教育的な観点からも、全部PIが書くということは絶対しないほうがいいのではないかなと思います。

○司会 ありがとうございます。胡桃坂先生、DCを取られたときのことなど、いかがでしょうか。

○胡桃坂 いや、僕のボスは全く書いてくれなかったので全部自分で書いたのですけども。もちろんPIが直してあげないと、そもそも体裁がちゃんとしていないのが普通です。だから、PIの目が入っていない申請書はもう読めないのですよ。だから、程度の問題はあるとしても、それはやらなければいけないなと思います。あと、業績を見るか見ないかというのは本当に微妙な問題で、つまり自分の分野だったら業績を見ないでも大丈夫です。自分の専門に近ければわかるので。だけど、自分の専門ではないところも審査しなければいけないときに、どうやって客観的に審査できるかというのと、やっぱり学会発表があるとか論文があるというのは安心感を与える要素になっていることは事実なので、それは逆に普段からそういう意識で積極的に先生に「学会、行きたいです」とか「論文、出したいです」と活発に活動するというだけでもいいのではないかとはいえますけど。

○中川 論文はともかくとして、学会というのは結構重要だと思いますね。ビジブルである人というのは通るだろうなと思うのですね。だから、学会でいい発表を聞いたことがあると、「あ、この人すごいな」と思いますし、応援したい気持ちにもなりますよね。

○胡桃坂 あと、質問ですね。

○中川 そうですね。

○胡桃坂 例えば発表するチャンスがなくても、こういうところに来て「はい」と手を挙げていたら、実は「あれ、どこの若者」ってこそこそ聞いているのですよ、みんな。

○中川 そうですよ。すごく見られていますね。

○胡桃坂 聞いていて、「ああ、そうなんだ、いい質問するな」とか。全然いいとは思えない質問でも評価されますから。「その研究は一体どこがおもしろいかわかりませんでしたので教えてください」という質問でも、「あれ、誰々。ああ、中川さんのところの人」とか。実はおじさんたち、あとでこそこそ話をして「あの若者、いいね」とか言うんですよ。それは今中川さんが言ったビジブルということにつながるの、手を挙げているおじさんたちをどけてでも自分がマイクの前に立つぐらいの勢いで行ったほうが絶対いいです。

○中川 あと1点だけ補足です。誤字脱字は絶対ダメですね。誤字脱字がある申請書というのは、それだけで読む気をなくすというのは本当に思います。

○司会 ありがとうございます。コメントも続々と来ております。例えば11番のコメントです。「申請書慣れたPIが手を入れた申請書には、普通の学生では勝てない」というご意見だったのですが、「研究室で申請書に対するサポートがあるかないかで」素晴らしい申請書になるか、学生さんのオリジナルの申請書で行くのか、その点は非常に重要かと思えます。

○小林　すごく短いコメントをしてもいいですか。僕は、これを見てもっと差がつくと思ったというか、やはりもらった人は「思う」にしますよ。そうじゃない人は「思わない」とするだろうし、かなりバイアスが掛かってくるからね。やはり4年のときから同じ研究室にいるかないかでもかなり違うし、先生のサポートとかも違うから、難しい制度ではあると思います。やるのだったら本当は全員にあげたほうがいいと思います、できることならば。短かったでしょう。

○司会　さきほど小林先生が紹介されたアンケート結果にもあったのですが、「支給額はそのまま採択率を上げてほしい」というような意見もございました。

それでは、次の質問に行きたいと思います。設問2ですが、若手研究者向けの研究支援、例えば科研費の若手研究などがありますけれども、それについてどう思いますかということと、あと、それに続けて関連した設問と続けていきたいと思います。

では、設問2です。「若手研究者向けの研究支援についてどう思いますか?」。1番が「若手を支援するのは適切(当然)と思う」、2番が「若手のみに偏重していると思う」。お願いします。

ありがとうございます。やはり将来を担う若手研究者を支援するのは適切(当然)だと思うということですね。小林先生のお話にもありましたが、ただ任期付きのポジションが多くても、若手研究者がだんだん年を取ってしまうという現実もあります。

そういうことで、先に続けて設問3も聞いてみたいと思います。設問2で「若手のみに偏重していると思う」という方は非常に少なかったのですが、そういう方は「ミドル・シニア向け(概ね45歳以上)の研究支援をもっと増やすべきだと思いますか?」。では設問3、お願いします。1番が「増やすべきだと思う」、2番が「必要ないと思う」。

そうですね、やはり、ミドル・シニア向けを「増やすべきだと思う」という答えが非常に多いですね。実は事前アンケートでもこのような意見がありましたので、この設問ができたのですが、小林先生、これについてはいかがでしょうか。

○小林　若手の人を支援するのはもちろん賛成だと思います。ただ、やはり若手には科研費よりもポジションだと思います。ポジションを与えなければ研究ができないわけだから、任期が3年しかない人に5年の研究費をあげられないわけで、やはりポジションを増やすべきだと思う。それで、シニアとかミドルの人にはその下に必ず若手がいるわけで、その辺のことを考えると、シニア、ミドルというのは若手よりもちょっと研究費を多めに配分するというのは、考え方としては僕は正しいとは思っています。ただ、このアンケート結果を持って文科省に行くわけですよ。そこで必ず言われるのは「いや、財布の中身が決まっていますから」「どれか増やすとどれかやめなければいけない」と必ず言われる。

○胡桃坂　賛成です。つまりミドル以上の人に研究費が行くと、その大部分は若手の給料に回っているのですよね、多くの場合は。つまり若手の雇用のために研究費を取らなければいけないというミドル・シニアクラスが多くて、それは若手を育成することのとても重要なポイントなのかなと思っています。

○司会　ありがとうございます。コメントも続々来ておまして、28番「胡桃坂先生、すごく面白い。コメントに味がある。」という応援メッセージもあります。若手支援に関しても来ておまして、27番「若手に支援しても結局お金はラボに吸い上げられるのですよねー」というコメントがありますが、これについてはどうでしょうか。



○胡桃坂 いや、これは別に、若手が自分でこういうふうに使いたいですとボスに言って使わせてもらえば、それがベストだと僕は思います。ただアイデアがないのであれば、こうやって使ったらいいんじゃないかというサゼスションはやはり上の人からしてもらったほうが使いやすい場合もありますよね。つまり正しくそのプログラムに従って使えるかという意味で。

○司会 ありがとうございます。コメントも多く来ておまして、31番「研究費を増やすのは、年代別の問題ではないと思う」とか、研究費自体に苦労している方のコメントが多く寄せられています。

科研費についても審査がどうなのかというコメントも来ていますね。小林先生のご紹介にもありましたが、科研費が皆さんが研究費を獲得される重要なソースだと思うのですが、最近始まったAMED（日本医療研究開発機構）の研究費が一体どうなのかということについて知りたいという意見が非常に多かったので、そちらの話題に移らせていただこうと思います。コメントもまた取り上げていきます。小林先生、まず簡単にどのような制度かご紹介いただけますか。

○小林 AMEDを取ったことがないのですけど。これは国が定める「医療分野研究開発推進計画」に基づいて、医薬品、医療機器、医療技術、再生医療、ゲノム医療、がん、脳とこころの疾患、感染症、難病、9個の統合プロジェクトを見識のある専門家をボスとしてトップダウンで研究を組織するというものです。トップダウンでやる医療系のグラントですね。予算は最初の年が1,400億円で、さっき見たら今年が1,200億円。そのうち半分ぐらいがグラントとして配られていて、残り半分が運営費とか、そのほかトランスレーショナルリサーチとか、そういうことに使われているそうです。

○胡桃坂 大谷さんはAMEDのお金をもらっているのではないですか。大谷さん、ちょっとコメントをするべきではないでしょうかと小林さんが言う予定になっていました。

○司会 ありがとうございます。はい、実は私、AMEDの研究費をいただいております。どんなふうに審査が行われているか、またAMEDの領域会議等に参加して、今どのような状況かを私の知っている範囲でしかないのですけれどもお話しさせていただこうと思います。

AMEDの場合、まず書類審査があって、書類選考を通過した課題についてヒアリング、面接選考があります。AMEDはその名前のとおり、日本医療研究開発機構というところで医療に関することと銘打っています。設立当初は臨床に直結する、かなりの出口志向と言われていたのですが、その後ノーベル賞学者とか様々な声で基礎的な領域の重要性が指摘されまして、今のところは、実際はそういう出口志向のトランスレーショナルな、治験とか患者さんに直結するようなところの研究領域ももちろんありますが、基礎的な研究を支援する領域もあります。私自身は本当に基礎の基礎の領域で採択をいただいております。

私はがん分野の研究者ですので、その領域のお話をさせていただきます。いくつかアンケートで領域が偏っているのではないかとありますが、がん分野はAMEDに入っています。すべての疾患の領域が入っているわけではなく、今小林先生が紹介されたようないくつかの領域が走っていますが、私のがん分野のことを言いますと、実は若手支援の枠がありまして、かなりの数の若手研究者がAMEDの若手支援の領域で採択をされています。領域によっては外国人のレビューアーも含まれていたりして、国際的に通用する若手研究者の育成をするということにも力を入れています。

研究費の額が気になるのですが、若手支援の枠でも基盤Bよりちょっと多いぐらいの額ですので、やはり潤沢なほうの研究費かと思います。ホームページを見ていただくと採択数がすごく少なく記載されているのですが、例えば3件しか予定していないと書いてあると、ちょっとそれだけで敬遠しがちですが、実際は割とフレキシブルです。ですので、AMED だからといってあまり敬遠せず、自分の基礎研究が少しでも将来医療シーズとなる可能性がある、そのようなストーリーが描かれるのであれば、ぜひチャレンジしていただきたいと思います。特に若手の枠がすごく増えているので、特に私のいるがん領域では本当に若手の方が多く採択されているので、ぜひチャレンジをしていただきたいと思っています。

あと、もう1つのポイントとして、科研費は常に10月11月と申請の時期が決まっておりますが、AMEDの場合は一次募集が科研費のあとぐらいいあって、二次募集、三次募集と随時募集されているので、しかもその採択数が少ないと書いてあっても、実際はもっと多くが採択されているということもあると私は感じています。ぜひホームページをまめにウオッチして、ぜひ医療シーズとなりそうなストーリーを書いて、基礎研究の先生方にも大勢の方に応募していただきたいと思っています。

コメントも結構増えています。AMEDに関する質問がありますね。52番の方、「AMEDっておじさん達の為の研究費？若手が参入する余地があるんでしょうか？」という質問に対しては、私が今お話しさせていただいたことで……。

○胡桃坂 でも、それはもう一つの側面があって、側面というか、逆の立場、選考委員の立場からすると、おじさんと若者が両方申請してきたら、絶対に若者にいい点をつけたくなるのですよ。だって将来があるから。将来があったほうが、ファンディング側としてはうれしいわけですよ。だから、意外と若い世代が思っているほどおじさんたちは強くないので。それはもう、大谷さんがおっしゃるとおり、意外と、どうせダメ元で出し続けているうちに書き方も上手になって、実力もついて、そのうちおじさんたちを凌駕するようになるのではないかなという気がしますけど。

○司会 そのとおりだと思います。本当に若手の方のほうがいい点をつけがちだと思いますので、ぜひ皆さんチャレンジしてほしいと思っています。それから、AMEDに関しての質問で、53番のコメント「数年で結果を求められて報告書も多くて大変」ということですが、これに関してはCRESTですと5年とかなり長いですが、AMEDは2年とか3年が多いですね。ですので、たしかに報告書も書かなければいけなくて。でも2年でなかなか論文まで行かないことが多いと思うので、それは配慮されると思いますし、また同じ領域で次のAMEDを申請することができますので。

○胡桃坂 大谷さん、58番のコメントが僕はすごくいいと思って。こういう人に言ってほしい。「クズ野郎にならないように頑張りたい」ということですね。だから、いつクズ野郎になってもおかしくないわけですよ、僕らも。だから、常にこういう気持ちで見られているなと思いつつ日々を過ごすというのが僕の日常です。頑張りたいということですから、こういうふうに声を挙げてくれたほうがいいと思います。

○小林 1つだけ、科研費とトップダウンの違いのところは、トップダウンは誰かトップの人がヨーロッパとかアメリカで話を聞いてきて、こういう分野のグラントをつくりましょうと決めて決まります。でも、科研費は応募者が多ければ採択件数が増える。これはボトムアップなんですよ。だから、科研費に関しては積極的に出すべきです、ダメだと思っていなくても。それが大切な姿勢だと思いますよ。

○司会 ありがとうございます。60 番のコメントに関してですが、「AMED の採択には特許を持つてるかどうかがとても重要だと聞きましたが本当??」と書いてありますが、これは別に持っていなくても大丈夫だと思います。その成果として特許が出せたらいいので、出せなくても別にいいと思いますので、その点は大丈夫です。何か先生方、質問やコメントがありましたらお願いします。大丈夫ですか。

では、次に移りたいと思います。AMED について少し話題にしたのですが、次は新学術領域研究についての設問です。この新学術領域研究というのも領域のテーマが決まって特殊な科研費だと思いますが、これについて胡桃坂先生、ご説明をお願いします。

○胡桃坂 もちろん喜んで。新学術領域はその 1 つの目標に向かってグループをつくって研究しようというものです。だから、先ほど小林さんの紹介したアンケートにもあったような、同じ分野の関係性とか人間性とか運とか業績とか、すべての要素が全部バランスよくないといいチームをつくれないういう側面がある。これは日本独特のやり方ですが、一定の成功を収めているのですよ。それで、欧米なんかも結局チームで申請するということが最近始まっているのですね。だから、これは文化としては続けていったらいいと思うし、若い世代はぜひ若者同士でコミュニケーションを持って、こういうことを一緒にやろうよとパイロット的に共同研究をすることで、その種ができます。我々も全部そうです。若い頃に始めた共同研究が実ってチームになっているということです。

○司会 ありがとうございます。新学術領域研究は同じようなテーマでチームを組んでする研究ということです。次に設問 4 について聞きたいと思います。これが「良い制度だと思う」、「あまりよくない制度だと思う」、「応募したことがないのでわからない」。3 つの答えですが、どうでしょうか。

はい、やはり予想どおりというか「良い制度だと思う」ということですが、これについてまたいろいろなコメントもお願いしたいと思いますが、加納先生、何かご意見はありますか。

○加納 新学術領域研究の存在自体は、私もいいと思います。グループでやるということはもちろんいいことはたくさんあると思います。現状としては、新学術領域を立ち上げようと思ってもほとんど通らないということがすごく大問題で、だから多くの方は新学術領域の中に入りたくても入れない、インサイドではなくてアウトサイドにいるということが現状です。

○胡桃坂 全くそのとおりで、パイが小さすぎるんですよ。新学術領域にもっと文科省は予算を割いて、もっと分野を包括的に入れてあげられるような大きさにすべきだと僕は思います。

○加納 あと、せめて昔の特定領域みたいに公募班を多くしないと、全く次の世代に受け継がれない。

○胡桃坂 そうなんです。それで僕が領域代表をやっていた時に、「若手を育てましたか」と必ず聞かれるわけですよ。だけど、若手を育てようにも若手をそんなにたくさん採択できていないという現状があるわけですよ。だって、公募で 20 人とか採択できないわけですから、15 人ぐらいしか採択できなければなかなか難しい。だから、そんなのではダメですよ。パイが小さすぎるのが問題です。

○加納 では、もう少し増やしてもらうにはどうしたらいいですか。

○胡桃坂 それは、実は小林さんと以前文科省に行っているいろいろ言ってみました。さっきも「文科(省)の人とか呼ばないのですか？」というのがあったけれども、来てほしいと言っていますよね、毎回。お願いしたときは「行きますよ」と言いながら、「いや、やはり当日は忙しいので…」とお茶を濁されるという状態なんです。つまり彼らは問題がどこにあるのかわかっているんです。どこにあるのかというと、やっぱり取ってくる額が小さすぎて、文科省の人と話してわかったのは、本当は彼らだってそうしたい。わかっている。我々の言うことを理解できる。だけれども、財務省に言ってそれが認められないという、彼らは彼らの壁があるのですね。そこはやっぱりパブリックコメントみたいなものでどんどん突き破っていかないとダメだと思うので、皆さん、声を上げましょう。

○司会 コメントの69番で「新学術の若手枠を作るとよい」もあります。小林先生、どうでしょうか。

○小林 若手を入れていないグループを通さなければいいんだよね。でも、新学術に応募したことがないからわからないというのはちょっとショックで、新学術は唯一僕らの業界でピアレビューができる集団ですよ、はっきり言ってね。学会はそんな専門家集団ではないので、これは必ずどこかで組織してどこかに入ってこういうことをやるというのは重要で、ダメ元でも出すという姿勢、出せば採択数は増えるので。でも、これは結構消耗するんだよね、落ちるとね。その辺のところはもっと効率よくうまくやって、グループを組んでとにかく出すというのが重要ななと思います。

○胡桃坂 あと、一言だけ、出すメリットについて。領域の審査に関わった人、領域から出ていった審査員はだいたいみんな見えています。それで、どんな人が応募してくれたというのを覚えていて、僕なんかは採択には至らなかったけれども話が聞きたいと思ってシンポジウムに呼んでトークしてもらったりもして、そうするとビジビリティが上がるので、やっぱり出すということ自体にも意味があります。

○司会 ありがとうございます。70番のコメントで「新学術がなくなるなどのうわさはあります」ということですが、これについて先生方、何かご存じですか。

○胡桃坂 なくなるという話は聞かないですよ。いずれにせよ、これは加納さんが言ったみたいに昔は重点領域、特定領域、名前を変えつつ変遷してきた、日本の中のサクセスフルな研究費制度の1つだと思います。ただ、今は昔に比べてパイが小さくなりすぎてしまって、その分野の中の重要な人ですら入れないということが問題となっていますね。今年は生物系なんか3件しか通らなかった。だから、皆さんがいっぱい応募すれば、その分、生物系の採択率が上がるので、応募するということが自体に大きな意味があると思ってください。

○司会 ありがとうございます。皆さんが疑問に思っている研究費としてAMEDと新学術領域研究を取り上げました。次に進みたいと思います。設問5です。これは誰でも陥る可能性のあることだと思いますが、研究費が不足した場合どうするかについてです。コメントを主体に進めていきたいと思うので、どんどんコメントをお願いします。設問5です。「研究費が不足して困ったことはありますか?」、1番「ある」、2番「ない」。お願いします。

困ったことが「ない」という方はすごいですね。これは予想どおりですが、研究費が不足して困ったことがある方が7割を超えています。「ある」と答えた会場の皆さん、それを乗り切る方法、乗り切ったご経験があれば、ぜひコメントをお願いします。

ではパネリストの先生方、何か乗り切り方があるかと思いますが、研究費が不足して困った場合どうしているか、どうした経験があったか、小林先生から順番にお願いできますか。すいません、先生はあるとおっしゃっていたと思うのですが。

○小林 いつも困っております。周期的に困っております。結局、一緒に研究グループでやっている、そういう人たちと共同研究をやるしかないですね。それと、研究費がないと実験ができないわけですし、実験だけが研究ではないので、論文を書く、あるいは新しいことを勉強する期間だと思って切り替える方法もあるのではないかと思います。

○司会 順番にお願いしたいので、もしあれば結構です。

○加納 ここ最近では科研費が繰り越しできるようになったのがものすごく助かっていて、ケチケチキャンペーンの結果、次の年にじわじわとやっています。

○司会 それはいいやり方ですね。

○中川 人に頼るのは結構大事かなと思います。だから、共同研究の人をお願いするというのは、ちょっと恥ずかしいところはあるかもしれませんが、お金がないときは「お願いします」というのができると結構いいのかなと思います。

○花嶋 科研費は必ずしも翌年度続くとは限らないので、とりあえずあるときにストックを貯めておくとか、あとはそのお金の中でできる研究を絞って、頭を使って研究を考えるのはすごくいいことだし、論理も整理されますので、そういうことを非常に意識しています。

○胡桃坂 外国の研究費みたいに、例えば5年間のファンディングだったら5年間のうちにこれだけ渡すから、あとはそれを自由裁量で割り振って使っていくよとしたらいいと思うのですよね。それができないのは、研究者側の都合ではなくて、たぶんお役所の都合なんですよ。そこは何とかお願いに行くことでオーバーカムできませんかね。

○司会 ありがとうございます。コメントでは、困ったときにどうするかというのはまだ出ていないかと思いますが、関連研究の方と共同研究をすることと、やはり民間助成金等を繰り越しできれば繰り越していくことが私としては実施していることかと思いますが。

コメントが出てきました。

○胡桃坂 ちょっと一言、いいコメントがあつて、95番です。「研究費の話は、この業界の偉い先生がたくさん国会議員になって、財務省に影響力を及ぼさないとダメじゃないですかね」。全くそのとおりだと思います。だから、もしも研究者の中でそういうことを自分がやっていきたいと思う人がいたら、

声を挙げて立ち上がってくれば、それはもう学会を挙げてサポートしましょうよ。たかだか1万3千人のこの学会でその人を当選させられるかどうかわからないけれども、でも草の根の一步ですよ。そういう人がたくさん出てくれば、ここは是正されると思います。

○司会 ありがとうございます。いくつかコメントが出てきました。99番ですと「グループ研究をしている先生に助けてもらいました」とあります。共同研究で何とか続けていくというコメントですし、先ほども出ていましたが、「民間の一部の研究費のように、使用年限をなくすか、繰り越しを5年くらいに伸ばしてほしい」というコメントもあります。

○加納 いいですか、よく小林さんから文科省に行って来たと聞くのですが、財務省へのつながりはないのですか。

○小林 コメントにもありましたね。文科省には、このランチョンセミナーの前と後と必ず行くわけですよ、委員と事務局と一緒に。こういうを出してください、と。そうすると文科省はすごくいい話を聞かせてくれます。例えば今年は卓越のマッチングが少ないから、途中でマッチング専門の業者を入れるのだとか。ほかにも、国際共同研究が少ないから、学振をもう1つ増やして、5年もので1年が日本、中3年が外国、最後の1年を日本、5年の学振を作りますとか言うのですよ。じゃあ、それをやれるのですかと言うと無理ですと言う。財務省がお金がないと言ってくるんですよ。それなら、財務省の人を呼んでこういう話を言えばいいのですかと言うと、そういう問題ではないと。役所の力関係だと言うわけですよ。だから、何かを増やすのだったら何かを削れと必ず言うてるのね。さっき国会議員の話が出たのだけれど、アメリカではそんなようなことになっていて、誰か国会議員になる。国会議員をやるのも大変だけれども、そういう政策を出している人がいたらその人に票を入れるということぐらいはできるかもしれないですね。そうしないとなかなかポリシーは変わらないと思います。

○司会 ありがとうございます。胡桃坂先生のご意見を受けて、105番「分生党の結成」、106番「胡桃坂先生、ぜひご出馬を」。

○胡桃坂 私に政治家は無理です。何人か候補がいますので、私が頼むことにします。

○司会 ありがとうございます。いくつも乗り切る方法のコメントを出していただきましてありがとうございました。

では、設問6に行きたいと思います。研究費についてのお話もだいぶ出てきたのですが、今小林先生のお話にありましたように、国の限られた予算をどのように研究費として配分するべきなのか。その方向性についての設問です。「低採択率で高額な研究費（つまり選択と集中）と高採択率で低額な研究費のどちらが良いと思いますか？」ということです。1番が「低採択率・高額な研究費」、2番が「高採択率・低額な研究費」です。ではお願いします。

はい、出ましたが、高採択率・低額な研究費という回答が圧倒的に多いのですが、これについて花嶋先生、ご意見いかがでしょうか。

○花嶋 冒頭の事前アンケートでもあったのですけれども、ほとんどの意見でもっと採択率を増やしてほしいということと、そもそもこの会場にいらっしゃる、あるいはそのアンケートに答えてくださった全世代、学生から PI まで 7 割方がお金に困っている状況である。企業では研究を行うお金がある程度は保証されているのに対して、来年度果たして研究をするお金があるかどうか。研究者であるにもかかわらず、仕事をするお金がないというのは非常に大きな問題だと思います。もう 1 つ、例えば低採択率、あるいは高採択率で全員に行きわたるようにするのは非常に難しい問題だと思います。例えば私の知っている、“Science” とか “Cell” に毎年出しているような非常に有名な先生でさえ、来年度は科研費が通る保証がないので、いつでもアメリカに行ってポスドクになる覚悟はできている。やはり基盤が保証されていないというのは大きな問題だと思います。現在の研究の規模に合った最低限の研究費が保証されて、なおかつ競争的にもっと上のレベルを狙うのであれば、それをさらに獲得できるような状況が整えばいいと思います。

○司会 ありがとうございます。ほかに先生方からご意見があれば…。小林先生、お願いします。

○小林 僕ももちろん低額でも安定的にもらったほうが、研究って継続性があるものだから、絶対そうだと思うのですよ。ただ、これを国がやらない理由は、ちゃんと選択しないと怠けるだろうみたいに思われているのですね。でも、実はそういうことはなくて、研究をするためにお金があってこそ初めて研究者だと思うのですよ。その辺のところはもっと声を挙げていかなければいけないかな。それと、選択と集中というのがあったのですけれども、実は研究者番号を持っている人の 25% しか科研費に応募していないのです。そのうちの 20% しか科研費を取っていない。だから、科研費を採るとするのは研究者の中でも実はかなり特別なことです。すごく選ばれているわけです。出している人にみんなあげたって、たかだか 25% ですよ。そんなところで、僕らはもうちょっと声を挙げて分配の仕方については文句を言ったほうがいいのかと思っています。

○司会 ありがとうございます。私も若手の時は採択されるということがすごくエンカレッジメントになって研究のやる気につながったので、やはり採択率を上げることのほうが私も賛成です。

それでは、次の設問に行きたいと思います。本ランチョンセミナーでは、皆さんのアンケート結果に応じていろいろな研究費を紹介するのも一つの役目だと考えています。昨今科研費の審査方法が変わったことは、皆さんお気づきになっているかと思います。どのように変わったかという、基盤 S は大区分のみ、基盤 A は中区分になって、基盤 S と A は異分野の審査員にもわかりやすい申請書にしなければいけないというふうになりました。基盤 B 以下も変化があって、これまでは書面審査後の合議があったのですが、それがなくなってウェブ上での 2 段階審査になっています。また、業績欄も、皆さん申請書でお気づきになったかと思いますが、論文リストを書く欄が変わりまして、内容の説明文が必要になりました。異分野の方のためかと思います。このような改革が行われておりますが、この審査方法について、このように変化があったことについてどう思いますかという設問です。

設問の 7 です。「科研費の審査方法が変わりました。「審査システム改革 2018」の審査方式についてどう思いますか?」、1 番「良くなった」、2 番「悪くなった」、3 番が「わからない or 審査システム改革 2018 を知らない」。では、お願いします。

この改革を知らないという方が非常に多く、良くなったか悪くなったかについては「良くなった」と思われる方が約 2 倍という結果になりました。これについて、加納先生いかがでしょうか。

○加納 推測ですけど、たぶん審査員の人じゃないとあまりはつきり認識できないのではないかと思います。申請の枠を大きくして審査するようになったというのは、たぶん小さな知り合い同士の談合みたいなものをなくすという効果もあり、それはいいと思います。逆に、あまり専門ではない審査をしなければいけない審査員にとっては、ものすごく内容の判断が難しく、そこで高得点を取ろうと思ったら、本当に受けのいい、まじめに研究しているのだけれども文章の能力がやたらいい人が通っていくという、ちょっと変な感じも、問題あるかなと私は思います。あと、ウェブ上での2段階審査になったのも、これも審査員しかわからないと思いますが、それはいいとっていて、自分の専門からとんでもなく外れている審査をしたときに、あっと振り返るいい機会になっていると思います。

○司会 ほかに何か、パネリストの先生方、もしこの改革についてご意見があればお願いします。

○小林 かなり努力されていて、良くなっていると思いますよ。ただ、やはり学会とかのコントリビューションはいまだにゼロなのね。本当は学会とかで一生懸命発表している人、議論をたくさんしている人は当然研究費をもらえるべきなんだけど、そういう要素というのはほとんど研究費の申請には反映されていないわけで、そこをもうちょっと何とかしてくれるといいかなとは思います。

○司会 ありがとうございます。これに対するコメントも少し出ておまして、136番の方は「業績リストは従来通りでいいと思う」というコメントもあります。「今までの積み重ねを重視するのは悪いことではない」。137番は「合議制で決めるのは良いが、負担はたいへん」、これは審査員としての経験のある方のご意見かと思えます。このようなかたちで、ともかく異分野の審査員にもわかりやすい申請書とか合議がなくなったということで少しフェアになっているかと思えますので、皆さんぜひこういうことも理解して申請をしていただけたらいいかと思えます。

○胡桃坂 この138番のコメントは、審査員をやっていて、本当にこうだと思うのですね。その人のために、その申請者が次にインプルーブするためのサゼスションをしても、それが申請者に伝わらないのでは意味がないので、それが審査員の合議のときの資料にしかなっていないので、ここは何かしたいところですね。それもどこかで言いませんか、小林さん。

○小林 審査員もなかなか、そう、「学会で良い質問したら…」そうだと思います。議論したプロジェクトのほうがいいに決まっていますよね。個人が頭の中で書いたもので、この書面だけを見て、これはできるのですかみたいなことになってしまうから。やっぱりある程度学会のコントリビューションを入れたほうがいい。それで、胡桃坂さんは何だっけ。

○胡桃坂 もう、いいよ。何かそのあと、いい話になったから。

○司会 ありがとうございます。私もそのとおりだと思います。ただ、AMEDのことをもう少し申しますと、実はAMEDの評価には審査員のほぼ全員のコメントが書いてあるので、科研費もそのように改革していったらいいかと私も思います。



○胡桃坂 でも、さっきも言ったけど、学会でディスカッションしている人は知らず知らずのうちにだんだん浸透していくので、本当に積極的に皆さん、マイクの前に立ちましょう、特に若い人は。

○小林 学会が重要だと思いますよ。そんなに大きな国ではないので、皆さん顔が見えるところで審査しているわけで、書面だけで勝負するというのは非常にリスクが高いし、やっぱりこういうところで議論した結果、この研究はやっぱり金を出さなければいけないなと思ったら絶対もらえるような雰囲気をつくっていかなければいけないと思うのですね。

○胡桃坂 そうですね。あと、質問するときに誰だかわからないよりは、「どどこ大学の誰々です」と名乗って質問すればいいじゃないですか。外国人はだいたいそうしますよ。それが自己アピールだから。それは積極的にやっていきましょう。

○司会 そのとおりだと思います。それでは、いろいろご意見は尽きないと思いますが、そろそろまとめに入る時間になってまいりました。最後に、本日のまとめの意味も込めてパネリストの先生から、何でも結構ですので、本日のテーマ「研究にまつわるお金」についてご提言を簡潔にお願いいたします。胡桃坂先生から順番にお願いします。

○胡桃坂 聞いていませんでした。「前に出たくてもそれを許さないボスの場合どうすればいいんでしょうか」という衝撃的なコメントがあって、それに気を取られていました。

○司会 本日のまとめについてです、一言。

○胡桃坂 もうとにかく若手は積極的に自分で自分のビジビリティを上げていくことが本当に役に立ちます。それはもう間違いないので、そこを頑張っていただきたいなと思います。

○花嶋 コメントで今、この142番「質問って評価されませんよね」という方がいらっしゃったのですが、実際に私がポストを得る前、海外の学会でももちろん英語でみんなの前で質問をして、その質問が良かったからうちにぜひ応募してくださいという経緯がありましたので、決して質問は無駄ではないと思います。

○中川 僕自身が研究費のことを考えて一番問題だと思うのは運営費交付金がすごく減っているというところで、なんでそうなってしまったのかを考えると、確かに昔大学ってひどかったところがあると思うのですよ。全然働かない大学教授がいたり、学生は授業に全然出てこなかったり、大学でやるのだったら自分でやったほうがいい、企業に行ったほうがいい。でも、この15年でもものすごく変わったと思うのですね。財務省の方とか文科省の方も、その変わったという現場を実は知らないのではないかと、その意思決定をしている人たちが「大学って、いまだに授業なんて出ないんでしょう」とか、言葉は古いですけど「レジャーランドなんでしょう」というふうに現場も見ずに言っているのではないかなという怒りが非常に強いので。だから、ちょっと思ったのですが、政治家をつくるのも大事ですが、博士課程から財務省に行く方がものすごく増えてくれれば変わっていくのかなとちょっと思います。

○加納 私も今日の話聞いていて、文科省も大事なんですけど、やっぱりその元となっている財務省と学会がもうちょっと大きなつながりになることが大事だなと思って、本気で胡桃坂さんも頑張ってる。やっぱり財務省に働きかけないと根本的な解決にならないような。要するにお金がないことをグシャグシャ言ってもしょうがないので、そう思います。

○小林 文科省はね、なかなか大変ですよ。局長級7人中2人が辞めちゃったぐらいだからね。なかなかお役所のほうも大変で、学位を取った人が役所に行くということは非常に重要だと思います。やっぱり科学政策というのは日本の一つの柱なんだよね。それが例えば学会とかとあまり縁がないとか。学会って、正直言って利害関係でなく研究だけの関わり合いでしょう。僕らはここに出て出演料をもらっているわけじゃないから。そういう中で本当に学問だけをディスカッションする場所の意見がほとんど上に行かないのです。例えば僕と大谷さんで文科省に行ってギョアギョア言ったって、「ああ、そうですか」と聞かれるだけだからね。それじゃあやっぱりまずくて、もうちょっとそういう仕組みをつくっていかねばいけなないと思います。

○司会 ありがとうございます。それでは最後に設問が1つあります。本日このランチョンセミナーで研究費について多くディスカッションし、フロアからのご意見もたくさんありがとうございました。150番「おもしろかったです!」という意見がありますが、おそらく胡桃坂先生のコメントが良かったのではないかと考えています。

では、最後の設問に行きます。本日のランチョンセミナーを皆さんお聞きになって、昨日のテーマともつながるのですが、「公的研究費でどのような研究を主としてサポートすべきですか?」、1番「将来実用化につながる可能性のある研究」、2番「実用化には関係なくても生物学の神秘を追求する研究」、3番「1と2の両方の研究をバランスよく(50:50)」、4番「わからない」。では、お願いします。

ありがとうございます。やはり予想どおりというか、昨日のテーマにもありましたが、実用化には今関係なくても生物学の神秘を追求する研究がやりたいと思っている方が多いのですが、3番の「1と2の両方の研究をバランスよく」という意見が一番多いという結果になりました。

やはり本当に未知のことを追求したいのが我々研究者だと思いますので、その道をやはり追及して、それがいつかもしかしたら実用化につながる可能性があると思いますので、今後この皆さんのご意見のとおりによりまたやっつけていかれることだと思います。

どうもありがとうございました。本日は本当にたくさんコメント、160件もコメントをいただきました。本日のランチョンセミナーについては会報2月号と学会HPに掲載しますので、そちらもご覧ください。アンケート用紙は会場の出口で回収しますのでお願いします。本日はどうもありがとうございました。

○小林 1つだけいいですか。大谷さん、どうもありがとうございました。

4年間お世話になりました。私は今年で理事が任期満了で終わりましたので辞めます。次のこのキャリアパス委員会の委員長は胡桃坂先生になりましたので。(拍手)

○胡桃坂 よろしくお願いたします。来年からまた頑張ります。

○司会 ありがとうございました。来年以降も非常に楽しみです。それでは本日は、皆さんどうもありがとうございました。これで終わらせていただきます。(拍手)

[了]